木木　佐賀県

「木木」とともに歩む

「木木」はつねに生活の傍らに

私にとって「木木の会」とは何だろう……。

いつに間にか、三十数年経った。だから私達会員は、それだけの長い年月、交友を持ったことになる。よくこれだけ長い年月を共有し、切磋琢磨し、作品を作り続けることが出来たなと感無量になる。会員皆同じ思いではなかろうか……。

「玄海派」を主宰しておられた松浦先生の指導で、「木木」が誕生した。先生なしでは「木木」は生まれなかった。先生が「木木」の生みの親である。

今まで「木木」は、代表が五人代わっている。五人目が私である。同人誌の一号を見ると、先生の指導で発行したので、代表の名前は記載されていない。一号を出した後、先生が一号だけではもったいないと言われ、二号からは代表を決めて発行してきた。

二号から六号の代表が木山葉子さん。七号から一五号が松原夕子さん、一六号から二六号までは小松陽子さん、二七号から三〇号までが井上幸子さんとなり、現在代表が私で、会計が稲葉けいこさんとなっている。私は、一六号から三〇号まで、会計を務めた。会計のほうも、日下部さん、西原茅さん、林さん、稲葉さんと四名が交代している。

松浦川の河口近くに住んでいた木山さんが、岡山に移られたために、七号からは松原夕子さんが代表となられた。

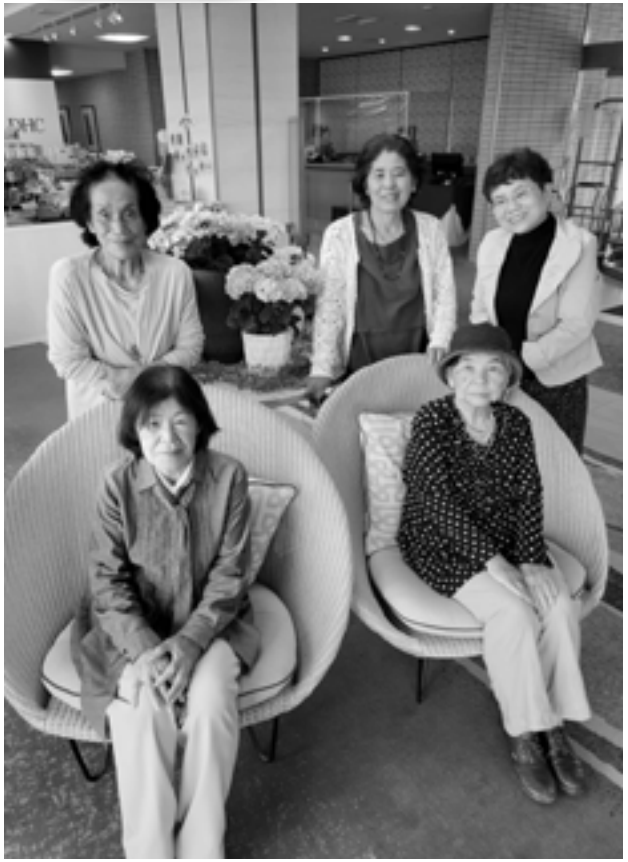
木山さんが代表をしていた時は、「木木」の当初でもあり、会員が大勢集まって編集をしていた。誘われ、また興味もあって、私も一、二度はお宅へ手伝いに伺ったが、若い私の出る幕でもないように思えた。それほど多くの会員が集まっていた。皆興味があったのだろう。同人誌の当初の号を見ると、講座を受講した全員の名前が並んでいる。「玄海派」の同人の方で、講座を受講し、「木木」の同人にも参加している方も何人もいて、現在の状況から考えると、うらやましいような気がする。当初は先生の指導で、原稿用紙五枚だの、十枚だのと割り当てられた。先生から夜によく電話がかかってきた。あの文章はこうしたほうがいいと助言されるのだ。

電話を受けて、目をかけて下さっているのだな、親切な先生だなと、ありがたいと思う反面、三十二歳の、たいした経験もない、未熟な私には、七十歳ほどになられる先生の頭の中にあるような文章は書けないなと、先生とのどうしようもない距離も感じた。私は今の未熟なままの頭と心でしか書けない、そう思うのだった。

木山さんが代表である時、私は、家が近くだったので、よく原稿を持って行ったものだが、木山さんのお宅からは、

松浦川に向いて開いた窓から、川の中にある岩が見えた。干潮の時には大小の岩が幾つも見え、カモメが休んでいるのを目にした。

そのあと代表になった松原夕子さんは、私の中学二年の時の国語の先生だった。気持ちの細やかな優しい先生だったが、中学三年の時に、家庭の事情で退職された。「木木」でご一緒することが出来て、私はこういう縁だったのかと、再び会えたことに感謝した。私の大好きな先生だった。



それから小松陽子さんが、代表を務め、私が会計となった。小松陽子さんが「木木」への参加をやめ、井上幸子さんが代表となって、私が会計を引き続きおこなった。現在は私が代表で、稲葉さんが会計をおこなっている。私が代表になったということは、皆が高齢になられたからだと、つくづく感じる。

会計のお手伝いくらいは出来ると思って始めたことなのだが、会計だけで一五年が経った。代表が交代する中で、一人減り、二人減りと去っていき、またあの人もこの人もと、亡くなった。現在会員は八名、当初の二十四、五名から比べると、本当に少なくなった。

何も考えずに、多くの会員とともに、書いていた時が懐かしい。書きたいことだけを書いていた時が、幸せな時だったとも思えるのだ。

毎日テレビでコロナの状況が報道される。高齢者が多いために、次回の「木木」は、原稿の締め切りを少し先延ばしにしている。

「木木」をこれからどう繋いでいけばいいのか、新しい人が入ってくれるのか、考えさせられてしまう。会員が増えなけ

同人雑誌とともにある人生

れば、先細りになる。食事会の席上で、「木木」があったから、生きられましたという声が聞こえた。私達会員にとって、「木木」は常に傍らにあり、なくてはならぬものになっていたのだ。私がこれまで安心して書き続けられたように、会員の意欲がある限り、私は「木木」を発行し続けようと思っている。これは一番最後に代表となった者の運命かもしれない。

自分を振り返る時、確かに「木木」は、生活の折々に、

いつも傍にあった。私は三十二歳の時に、松浦先生の小説入門講座を受講した折り、先生の指導で、「木木」に参加した。二つになったばかりの三女を、膝の上に乗せて話を聞いたことを思い出す。

私は高校三年の時、国家公務員の試験に合格し、公務員として、建設省（今の国土交通省）で、退職まで働いた。建設省が国土交通省に変わったのは平成十三年。建設省、運輸省、国土庁、北海道開発庁が一つになった国土交通省は、本当に大きな省庁となり、私は、面白い体験をたくさんさせてもらった。

新規採用職員として入った武雄河川事務所では、潮止堰が造られていた。陽にあたり、川風に吹かれながら眺めたことを思い出す。

私は三人の子供に恵まれた。子供を託児所に連れて行き、保育園に送り、病気をすれば、夜中に電話をかけ病院に連れて行った。薬を持たせて保育園に送った。雨の日も、風の日も、雪の日も、炎天下の日も、歯を食いしばるような日が続いた。そして子育てと同時に、国土交通省のそれぞれの現場を歩き回ることで、私は人生を二度生きて、味わっているような気がした。雪の日、小さな子供を連れて保育園に行く。園庭の雪に雲間から射した朝日が当たっている。私はせわしなく毎日を生きていたが、幸せに満たされていた。山々は、山水画のように美しいのだ。それを「木

木」は、教えてくれた。「木木」はいつも傍にあった。子供と公園で遊んでも、いつのまにか物語になっていた。

河川の事務所、道路の事務所、ダムの事務所と転勤して回った。厳木ダムでは本体工事に着手する年に転勤し、それから定礎、竣工式と経験した。着物を着て、テープカットの鋏を、黒塗りの盆に乗せて渡したこともあった。嘉瀬川ダムに転勤した時には、地権者の移転が済み、取付け道路やダム湖の上に渡す橋梁の橋脚を造るのに、職員一丸となって奔走した。それもまた「木木」の小説作品の題材となった。海の中道海浜公園では、誰よりも早く大きな水槽の中で泳ぐ魚を見た。吉野ケ里歴史公園では、発掘現場を見に行った。縄文終期から弥生時代、大きな環濠集落が形成され、甕棺（かめかん）がたくさん埋まっている。佐賀空港が出来た時は、国土交通省のヘリコプターに乗り、佐賀県の上空を飛んだ。有明海や北山ダムのある背振山系、佐賀市や唐津市街の上を飛んだ。普賢岳が爆発し、復興事務所が出来た時は、火砕流が流れる普賢岳を見に行った。

嘉瀬川ダムや佐賀国道に通勤するようになった時、子供たちは大学生になっていた。私は毎日、朝六時半に家を出た。現在、西九州道路や、有明海沿岸道路が着々と造られている。道路は出来上がった区間が供用開始され伸びて行く。私は今、それらを享受している。退職する年の最後の式典は、道路の開通式だった。職員皆で、開通式を行なったことが懐かしい。

私はその折々に経験したこと、感じたことを「木木」に書き続けた。木木はいつも共にあり、人生そのものではないかと思う時がある。それは会員にも同じように当てはまるだろう。それぞれの人生があり、「木木」があり、私達は、共に歩いてきた。「木木」を介して寄り添い、書き続けた。食事会の席上で、「お義母さんがきつくてねえ」とはしゃいで、皆が笑っている。「木木」があったから、生きられましたと言っている。「木木」は私達の心を浄化し続けてくれたのだ。

私は今、代表をしているが、一番年若いというだけである。誇れるものはない。これからも自分の心に真摯に向き合い、ただ書いていくだけだ。木山さんが、今回も「水水母」で優秀賞を取られたと連絡を受けた。同じ会員として嬉しい。それは私達に継続と意欲という力を、限りなく与えてくれる。

『木木』の会
〒847・0022
佐賀県唐津市鏡六一・一
TEL 0955・77・4156
林　絹子方